

おかしな時代記

コト八日行事 その②

― 雨山町の場合 ―

前回の太田町に引き続き、今回は、雨山町のコト八日行事を紹介します。雨山町では以前、オカタ送りのことをオカトリゴトまたは送り神と言っていました。雨山町のオカタ送りは、二月八日に近い土・日曜日に行われています。しかし、同じ内容・願いを持っている行事でも大きな違いが見られます。それは、人形の大きさと、人形を乗せるコシを作ることです。雨山町のオカタ送りでは、三体の藁人形を子どもたちが鉦を鳴らし唱えごとを唱えながら雨山ダム側のオカタ場まで人形を送って行きます。

人形製作に関しての詳細な伝承はありませんが、コシに乗せる人形は、侍の大將とお供（または船頭、うち一は女性）です。一体の大きさは三三センチくらいで、形態は以前から変わっていないようです。コシの大きさは、長さ七八センチ、幅三八センチ、高さ二〇センチ、作り物としてハタと称する御幣（三層ほどの笹竹）を二本用意します。

オカタ送りの行列は、年長者の鉦（一人）を先頭に、コシに乗せた人形（二人）、ハタ（二人）の順番に並び、大人が子どもに唱えごとを教えます。そして「ニガツヨウカノコトハジメ」と唱える

度に、鉦を二回鳴らしながら、寺から県道一宮・額田線に沿ってオカタ場まで片道約三キロの道のりを進んでいきます。オカタ場に到着するとオカタ（コシと人形）とハタを置き、手を合



コシに乗った三体の人形

わせてお辞儀をし、その後は振り返らずに黙って帰ります。

一年間、岡崎に残る祭り・行事を紹介してきました。県内でも珍しい行事が、この岡崎で長く伝えられています。そして、それらは決して特殊な例ではなく、地域の人々が暮らしの中で守り伝えてきたものばかりです。しかし、このまま少子化や過疎化が進むと、行事の存続が難しくなる可能性もあります。今まさに、ふるさとに伝わる先人の「こころ」を未来に伝え、生かすためにみんなで「知恵」を出し合う時期にきています。今後、岡崎むかし館の取り組みを通して皆さんのお役に立てれば嬉しく思います。一年間ありがとうございました。

図書館交流プラザ岡崎むかし館主任専門員

野本 欽也

「ふつつかま」病気の話

切りずに直す ― 脳血管内手術 ―

脳の手術というと「痛い」「怖い」「つらい」の三拍子が揃った大手術を想像する人が多いと思います。しかし、最近では脳外科領域にも手術低侵襲化（痛みや苦痛などをできるだけ少なくする）の傾向が強まっています。

その傾向の一つが「脳血管内手術」です。この手術は、足の付け根から血管の中にカテーテルと呼ばれる細い管を挿入し、脳の血管まで運び、病変部を詰めたり、広げたりする治療法です。局所麻酔での手術が可能なので、体力的負担が軽く、痛みも軽微で、入院期間が短いのが特徴です。

脳血管内手術の中で、最も代表的なものは「脳動脈瘤コイル塞栓術」です。脳動脈瘤は破裂するリスクも膜下出血を引き起こします。従来は頭蓋骨をあけて瘤をクリップでつぶすことが治療の主流でした。そのため、瘤の場所や脳・全身の状態によっては手術できない場合もありました。これに対し

て、脳動脈瘤コイル塞栓術は、瘤の中に「コイル」と呼ばれる金属製の糸を詰め込み、瘤に流れ込む血流を減らして破裂を防いでいきます。全身状態の悪い患者さんや、開頭術では到達困難な場所にある瘤への低侵襲治療として導入されています。コイルには、太さ・硬さ・形状など様々な種類があり、中には総長1センチ以上のコイルを挿入することもあります。手術成績は、クリップとコイルで大差はありませんが、瘤の場所・大きさ・形状によって、どちらの方法が最適かを判断した上で治療を行います。市民病院では、緊急手術を含めて、どちらの方法でも対応できる体制を整えています。

岡崎市民病院 脳神経外科

脳血管内治療部長

錦古里 武志

市民病院を受診する際は「かかりつけ医」の紹介状をお持ちください。